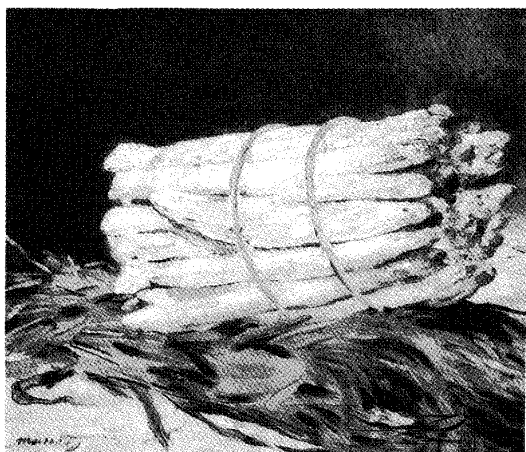


プ ル ー ス ト と 絵 画^{*})

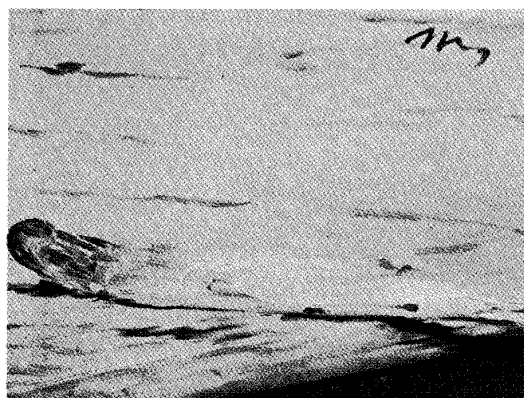
—— マネの『アスパラガス』 ——

青 柳 り さ

マネはシャルル・エフリュシという人物に『アスパラガスの束』を800フランで売ったが、この絵がたいへん気に入ったエフリュシはマネに1,000フランを送った。そこでマネは、「あのアスパラガスの束には1本抜けていました」という言葉を添えて、新たに『アスパラガス』の絵を送った。シャルル・エフリュシはシャルル・アースと並ぶスワン（シャルル・スワン）の重要なモデルの一人である。



『アスパラガスの束』
(ヴァルラフ・リヒャルト美術館蔵)



『アスパラガス』
(オルセー美術館蔵)

序

プルーストは、文学作品や絵画作品を、様々な形で自分の作品の中にとり込む¹⁾。

例えば、眠っているアルベルチーナの後れ毛の描写には、作中の画家、エルスチールの絵の、背景の木を用いている。

ときたま後れ毛がただ一筋まっすぐに、エルスチールの描いたラファエル風の絵の遠景にそびえて見える、あのか細くほのかな月明かりの木々と同じ遠近効果をあたえていた²⁾。

背景の木と髪の毛というとんでもない組み合わせ、そして、その遠近効果まで論じることで、ここに美しい幻想的な場面が現出している。『失われた時を求めて』の中では、あち

らこちらで、このような美しい文章と出会うことができる。

あるいは、オデットにボッティチェルリのゼフォラを見³⁾、パランシ氏の鼻にギルランダーヨの彩色を⁴⁾、ブロックにベリーニの『モハメド2世の肖像』を重ねる⁵⁾。

文学作品にしても、ラシーヌ、ボードレー、バルザック、ルコント・ド・リール、ゴンクール等々、数限りなくとり込まれ、引用されている。

このような形でとり込まれているものの中に、マネの作品、『アスパラガスの束 *Une Botte d' Asperges*』もある。

I

ジェフリー・マイヤーズは、その著者『絵画と文学』の中で、「ブルーストは、絵画作品を自分の作品の中にとり入れることによって、現実の生活と芸術との間に橋を架けている⁶⁾」とも、あるいは「台所の女中にジオットの『慈愛』を重ね、スノップの典型たるブロックに、『モハメド2世の肖像』を重ねることで、ありふれた現実を馬鹿馬鹿しいほどに高く評価している、その落差によって、ブルーストは絵画を皮肉に用いている⁷⁾」とも指摘している。

しかし『ゲルマントの方』でとり挙げられているマネの『アスパラガスの束』については、芸術作品がむしろ不当に低く評価された描き方がなされている例といえよう。

(ゾラが話題になっている場面である)

(ゲルマント公爵夫人は) 誰にも不行き届きがないように、アスパラガス・ソース・ムスリーヌを、もう一度私に出すように合図しながらこう言った。「ねえ、たしかゾラがエルスチールについて評論を書いていますわね⁸⁾」

これはゾラの『マネ論』(1867年)をさしており、ここで作品中の画家エルスチールと、実在の画家マネが重ねられている。

続いて、ゲルマント公爵によって、エルスチールの絵の評価がなされる。

「スワンはあつかましくも私達に『アスパラガスの束』を買わせようとしてました。いや、2、3日は家にありましたよ。描いてあるのはただそれっきり。ちょうどいまあなたの食べておられるのと同じようなアスパラガスの束。だが私は、エルスチール君のアスパラガスをいただくのは断りましたよ。300フランほしいというんですからね。アスパラガス1束に300フラン!たとえ初物でも20フランが値どころですよ⁹⁾」

ブルジョワ的評価、ある意味で当然の、誰もが思う判断が下されているとも言えるだろう。絵に描かれた、芸術作品となっているアスパラガスを食卓(台所)のアスパラガスに

比べるなどといったことがなされ、芸術作品となっているアスパラガスが、不当に、次元を落として評価されている。

一方、これとは逆に、台所のアスパラガスが、次元を高めて、芸術作品のごとく、絵画のごとく描写されているシーンが、「コンブレ」の章にすでにあらわれていた。光と色彩に溢れたアスパラガスが、コンブレの台所のテーブルの上に出現する。

私がうっとりしたのはアスパラガスを前にしたときだった。それは、群青と薔薇色に染められ、穂先はモーヴと紺碧とに細やかな筆遣いで点描され、根元のところにきて一苗床の土にまだ汚れてはいるが一地上のものならぬ虹色の光彩によってうっすらとぼかされていた。そうした天上の色彩のニュアンスは、戯れに野菜に変身した美しい女人たちの姿をあらわにしているように私には思われた。そんな美女たちは、その食用の引き締まった肉体の変装を通して、暁の生まれたばかりの色彩のうちに、さっと刷きつけられた虹の色や消えゆく青い暮色の中に、貴重な本質をのぞかせていた。そして、私がアスパラガスを食べた夕食に引き続く夜の間に、この変身の美女たちは、シェイクスピアの夢幻劇のような詩的で野卑なファルスを演じ、私のしびんを香水瓶に変えて遊び、私はまたしても、その本質を認めることができるのだ¹⁰⁾。

プレイヤード版の注も、この2つのアスパラガスに関するエピソードを関連づけ、対立させている。コンブレの野菜としてのアスパラガスの描写を「美的に価値を高めている《Valorisation esthétique》」とし、先程引用した『ゲルマントの方』の芸術作品となっているエルスチールのアスパラガスの絵のとり扱いを、その「対立項《a contrario》」としているのである¹¹⁾。つまり、台所のアスパラガスを芸術作品へと引き上げ、芸術作品となっているエルスチール(=マネ)のアスパラガスを台所のアスパラガスに引き戻す、ということが行われていることになる。しかし、関連はただそれだけなのだろうか?

Ⅱ

まず、コンブレのアスパラガスの Source について考えてみたいと思う。これについては既に、研究者の指摘もいくつかあるが、どれも、両場面、すなわち、コンブレのアスパラガスとゲルマンのアスパラガスの関連を深めるものではない。

ジュリエット・モナン—オルヌンは、『プルーストと絵画 *Proust et la Peinture*』において、洗練されたコロリスト（色彩家）としてのプルーストを評価している¹²⁾。そして、先程引用したアスパラガスの描写に引き続く段落に現れるパドヴァの壁画の『美德 *Vertu*』に注目する。

薔薇色のチュニックの上の方でアスパラガスを取り巻いている青色の軽快な王冠は、あのパドヴァの壁画の『美德』の額をとりまいている花や、籠にさしている花がそうであるように、ひと星ひと星と細微に描かれている¹³⁾。

この箇所を引いて、彼女はプルーストとラスキンの密接な関係を指摘し、「ある美しいものを目にする時、彼らのイマジネーションは、必ずやアナロジーを働かせる、たとえば、アスパラガスの軽快な王冠がパドヴァの『美德』の額をとりまく花を思い起こさせるといったように、自分たちの記憶の貯蔵庫から、その等価物を思い起こさずにはいられない¹⁴⁾」と言っている。

一方、プレイヤッド版の注の方は、このコンブレのアスパラガスを描写する文章は、ミシュレの『海 *La Mer*』の「水母 *Fille des mers*」の章のパスティッシュであると指摘している¹⁵⁾。そしてその共通点として、ミシュレが「雲の中のような《comme dans un nuage》」と書いた天上のごとき、「虹色の光彩《irisation》」と色彩のニュアンス、あるいは、ミシュレの「青色の軽快な帯《la légère bande d'azur》」がプルーストの文章の中で「青色の軽快な王冠《legères couronnes d'azur》」

となって入り込んでいること、さらには、変身しようとする「美しい女人たち《délicieuses créatures》」のテーマ、そしてその美しい女人たちが参加する「夢幻劇《féerie》」という共通点、さらには、神話、女神たちの比喩を挙げている¹⁶⁾。

実際、プルーストは、『ソドムとゴモラ』の章に、ミシュレの名前を出して「水母」について述べている。

または、砂の上に死んでゆくはかない水母のようだ。(…)水母！蘭！私がただ自分の本能に従うばかりであった時には、水母はバルベックの海岸で厭に思われていた。しかし、ミシュレのように、博物学や美学の見地からそれを見るすべを知った時、水母は紺碧の花火、紺碧の噴水のごとく美しいものに見えた。それは透き通ったピロードのような花卉をそなえて、海の薄紫の蘭のようではないか¹⁷⁾。

作品の中で、このようにミシュレの言及した「水母」がとり挙げられ、アスパラガスの描写においても、共通点を挙げる事ができることから、ミシュレの文章が、意識的にせよ無意識的にせよ、コンブレのアスパラガスの描写にとり入れられていることは間違いのないといえよう。

ただ、ミシュレの「水母」の章が非常に悲劇的なトーンで描写されているのに対し、プルーストのアスパラガスの方はといえば、見てきた通り、元気一杯、陽気なアスパラガスが描かれているわけで、ミシュレが使われているとするならば、これはパロディとしか考えられない。

Ⅲ

以上、2つの Sources の指摘は、一方は高貴な寓意画、もう一方は、海の奇妙な生物についてであるが、共通してそこに、アスパラガスとジオットの『美德』、アスパラガスとミシュレの「水母」、というアナロジーが認められた。

現にジュリエット・モナン—オルヌンは、ブルーストとラスキンの親密性として、外界、とりわけ、美しい物を見る際の、彼らのアナロジーの才能を指摘していた。コンブレのアスパラガスの描写に関しても、このアナロジーの指摘は当てはまる。そしてコンブレのアスパラガスを描写する際に、マネの『アスパラガス』がブルーストの脳裡に浮かんだことは十分に考えられることである。

あるいはまた、先程引用したように、ブルースト自身が、水母に関して「ミシュレを知るまでは厭だと思っていた水母が、ミシュレを知って以来、美しいものと見るようになるようになった」と書いていた。同様に、マネのアスパラガスを通して、台所のアスパラガスを見る時、それが印象派の絵のごとく、光と色彩に溢れた美しい存在と見えてきた、ということができるよう思う。

『ゲルマントの方』でアスパラガスが話題になった時、エルスチール＝マネ、エルスチールの『アスパラガスの束』＝マネの『アスパラガスの束』という図式が成立していると述べたが、このアスパラガスの絵と、そしてマネがもう1枚ものにして『1本のアスパラガス *L'Asperge*』の絵が、コンブレのアスパラガスの描写にとり込まれている、と考えることは自然なことに思える。実際、同じ作家が、同じ作品のなかで、アスパラガスなどというひどく日常的な素材を、全く無関係に、2度にわたってとり挙げている、と考える方が不自然であろう。

このような見地から、コンブレのアスパラガスの描写を観察すると、アスパラガスを描写するこの文章が、絵画の用語を使って、まるで絵画を描写するかのようになっていること、その色彩、形態、印象が、マネの2枚のアスパラガスの絵と重なってくるのがわかる。そしてこの2枚のアスパラガスの絵と、ブルーストの文章を対照させるとき、絵と文章が重なってくるのである。

まず、絵画の用語という点からこのコンブレのアスパラガスの文章を読んでいくと、「ウルトラマリンとばら色に染められ《*trempeés*》」、「穂先はモーヴと紺碧にこまやかな筆遣いで点描され《*finement pignoché*》」、「根元のところまできてうっすらとぼかされている《*se dégrade insensiblement*》」、「天上の色彩のニュアンス《*nuances*》」、「さっと刷きつけられた虹の色《*ébauches d' arc-en-ciel*》」、「ひと星ひと星と細微に描かれている《*finement dessinées*》」。テキスト全体が絵画の用語を用いて書かれていることがわかる。

次に、台所のテーブルの上に置かれたアスパラガスを、まず、マネの『1本のアスパラガス』と対照してみると、この絵と文章の、色彩、官能的なイメージが重なってくるのがわかる。テキストにそって確認していくと、「ウルトラマリン《*outramer*》と薔薇色《*rose*》に染められ、穂先はモーヴと紺碧《*mauve et azur*》とにこまやかな筆遣いで点描され、根元のところにきて、一苗床の土にまだ汚れてはいるが—地上のものならぬ虹色の光彩《*irisations qui ne sont pas de la terre*》によってうっすらとぼかされている」、あるいは「そうした天上の色彩のニュアンス《*ces nuances célestes*》」、あるいは「ひきしまった肉体の変装を通して、あかつきの生まれたばかりの色彩《*couleurs naissantes d' aurore*》のうちに、さっと刷きつけられた虹の色《*ébauches d' arc-en-ciel*》や、消えていく青い暮色《*extinction des soirs bleus*》のなかに、貴重な本質をのぞかせていた」という具合である。

さらに、マネの『アスパラガスの束』の方と対照してみると、色彩は勿論、形態、複数であること、ある種の俗っぽさ（俗っぽい官能的なイメージ）が重なってくるのがわかる。「そうした天上の色彩のニュアンスは、たむれに野菜に変身した美しい女人たちの姿をあらわにしているように私には思われた。

そんな美女たちは、その食用の、ひきしまつた肉体的変装を通して、暁の生まれたばかりの色彩のうちに、さっと刷きつけられた虹の色や消えゆく青い暮色のなかに、貴重な本質をのぞかせていた。そして私がアスパラガスを食べた夕食に引き続く夜の間じゅうこの変身の美女たちは、シェイクスピアの夢幻劇のような詩的で野卑なファルスを演じ、私のしびんを香水びんに変えて遊び、私はまたしてもその本質を認めることができるのだった」背景の土色と乱雑さが、醸し出す印象が、「しびんを香水びんに変えて遊ぶ」という奇妙な文章と重なってくる。

アスパラガスのテキスト全体を与える肉感的な印象と、マネの1本のアスパラガス、そして、東のアスパラガスの絵の与える印象は、ミシュレが女性たちの神秘的、神話的な魔性を秘めた美しさで水母を形容しているのとは異なるものである。マネの絵に現れるアスパラガスは、その色彩と形態、ある種の猥雑さから、横たわるオランピアとも、束ねられた女たちとも見えてくるのである。

ジョルジュ・バタイユはマネの絵に関してこう言っている。

人間の画像が薔薇やパンの画像と同じ位置にまで引き下げられると同時に、静物も人物の水準にまで引き上げられている。(…)アグレシブな瞬間においては、冷やかすような要素があらわれ、それが取るに足らない事物をさらに活気づけ、突飛な感じさえ与える¹⁸⁾。

結 び

プルーストはジオットをとり込み、ミシュレの文章をひっくり返し、絵画の用語を用いて、マネのアスパラガスを思い浮かべつつ、一種ユーモラスな冷やかしの要素をまじえて、光と色彩に溢れた台所のアスパラガスを描出しているのである。プルーストが芸術作品を鑑賞し、たくわえてきたもの、それを想起して、自分の文章の中にとり込み、定着させて

いく一つの例を観察することができたかと思う。

注

*) テキストは、Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Gallimard, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 4 vol, 1987, 1988, 1988, 1989. を使用した。以下の注では、本書からの引用については、巻をローマ数字で、各篇のタイトルを以下の省略記号で記す。

Abréviation :

Sw. : *Du côté de chez Swann*; *JFF* : *A l'ombre des jeunes filles en fleurs*; *Gu.* : *Le Côté de Guermantes* ; *SG*: *Sodome et Gomorrhe*; *Pris.* : *Prisonnière*; *Fug.* : *Fugitive* ; *TR*: *Le Temps retrouvé*.

- 1) 拙論『花咲く乙女たちのかげに』におけるボードレールの『通りすぎた女へ』『年報フランス研究』n° 20 1986 pp. 49-62. 及び、「もう一人のアルベルチーヌ — プルーストとバルベール・ドールヴィー — 『年報フランス研究』n° 24 1990 pp. 169-178. 関西学院大学フランス学会 参照。
- 2) 《(…) parfois une mèche isolée et droite donnait le même effet de perspective que ces arbres lunaires grêles et pâles qu'on aperçoit tout droits au fond des tableaux raphaëlesques d'Elstir.》 III, *Pris.*, p. 579.
- 3) I, *Sw.*, pp. 220-22.
- 4) *Ibid.*, p. 219.
- 5) *Ibid.*, p. 96.
- 6) Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, Manchester University Press, 1975. (ジェフリー・マイヤーズ『絵画と文学』松岡和子訳 白水社 1980年 p. 194.)
- 7) *Ibid.*, p. 164.
- 8) 《(…) pour ne manquer à aucun, faisant signe aussi qu'on me redonnât des asperges sauce mousseline, 《tenez, je crois justement que Zola a écrit une étude sur Elstir, (…)》, ajuta-t-elle.》 II, *Gu.*, p. 790.
- 9) 《Swann avait le toupet de vouloir nous faire acheter une *Botte d'asperges*. Elles sont même restées ici quelques jours. Il n'y avait que cela

- dans le tableau, une botte d'asperges précisément semblables à celles que vous êtes en train d'avalier. Mais moi, je me suis refusé à avaler les asperges de M. Elstir. Il en demandait trois cents francs. Trois cents francs, une botte d'asperges! Un louis, voilà ce que ça vaut, même en primeurs!» *Ibid.*, pp. 790-91.
- 10) «(…) mais mon ravissement était devant les asperges, trempées d'outremer et de rose et dont l'épi, finement pignoché de mauve et d'azur, se dégrade insensiblement jusqu'au pied — encore souillé pourtant du sol de leur plant — par des irisations qui ne sont pas de la terre. Il me semblait que ces nuances célestes trahissaient les délicieuses créatures qui s'étaient amusées à se métamorphoser en légumes et qui, à travers le déguisement de leur chair comestible et ferme, laissaient apercevoir en ces couleurs naissantes d'aurore, en ces ébauches d'arc-en-ciel, en cette extinction de soirs bleus, cette essence précieuse que je reconnaissais encore quand, toute la nuit qui suivait un dîner où j'en avais mangé, elles jouaient, dans leurs farces poétiques et grossières comme une féerie de Shakespeare, à changer mon pot de chambre en un vase de parfum.» I, *Sw.*, p. 119.
- 11) *Ibid.*, Notes et variantes, pp. 1158-59.
- 12) Juliette Monnin-Hornung, *Proust et la Peinture*, Droz et Giard, 1951, pp. 172-75.
- 13) «(…) et les légères couronnes d'azur qui ceignaient les asperges au-dessus de leurs tuniques de rose étaient finement dessinées, étoile par étoile, comme le sont dans la fresque les fleurs bandées autour du front ou piquées dans la corbeille de la Vertu de Padoue.» I, *Sw.*, pp. 120.
- 14) *Op. cit.*, p. 175.
- 15) Jules Michelet, *La Mer*, Hachette, 1869, pp. 161-174.
- 16) I, Notes et variantes, pp. 1158-59.
- 17) «(…) comme une méduse stérile qui périra sur le sable, (…). Méduse ! Orchidée ! Quand je ne suivais que mon instinct, la méduse me répugnait à Balbec ; mais si je savais la regarder, comme Michelet, du point de vue de l'histoire naturelle et de l'esthétique, je voyais une délicieuse girandole d'azur. Ne sont-elles pas, avec le velours transparent de leurs pétales, comme les mauves orchidées de la mer ? » III, *SG*, p. 28.
- 18) Georges Bataille, *Œuvres complètes IX*, Gallimard, 1979, «Manet», pp. 157-158.

(平成3年10月15日受理)